



**Data**

監督・脚本: テイラー・シェリダン  
 出演: ジェレミー・レナー/エリザベス・オルセン/ジョン・バーミンガム/ジュリア・ジョーンズ/ケルシー・チャウ

### ■■■ショートコメント■■■

◆日本には少数民族としてアイヌ人が主に北海道で生活しているが、アメリカにはネイティブ・アメリカンがおり、彼らは今でも居留地で生活しているらしい。日本人がそんな実態を知る機会はほとんどないが、合衆国魚類野生生物局のエージェントで、ワイオミング州にあるネイティブ・アメリカン居留地の「ウインド・リバー」で野獣退治等の仕事をしている男コリー・ランバート（ジェレミー・レナー）が主人公として活躍する本作を観ていると、それが少しわかってくる。

ある日、コリーは18歳の少女ナタリー（ケルシー・チャウ）の凍死した死体を発見！これは事故？それとも殺人？FBIの特別新人捜査官、ジェーン・バナー（エリザベス・オルセン）が現地にやってきたが、検死の結果、殺人事件と断定できなかったため、FBIの捜査チームを増強することができず、ジェーンはコリーに応援を頼むことに。

本作では、終始一貫して、少しぶっきらぼうだが、このコリーの冷静沈着かつ的確な判断が際立っており、それがストーリーの“納得性”の要因になっているから、その演技と存在感に注目！

◆凍死したナタリーの死体はそれなりに酷いが、検死の結果、暴行の跡とレイプの跡を発見。そして、コリーの説明によると、ナタリーの死因は極寒の中を長く外気にさらされながら歩き、最後には冷気を急速に吸ったことが肺出血を生んだらしい。専門医による検死の結果でもそこまで判断は出なかったのだから、経験に基づくだけとはいえコリーの分析力はすごいものだ。しかも、コリーがナタリーの足跡と血の跡をたどってみると、彼女が寒気の中を歩いた距離は約10kmもあったから、ナタリーの運動能力はすごい。ナタリーがここまで歩いた（歩けた）のは、一体なぜ？

◆そんな本筋のストーリー展開とは別に、①コリーと先住民の娘であった元妻ウィルマ・ランバート（ジュリア・ジョーンズ）との事情 ②2人の子供の長女が、ナタリーと同じく

らいの歳に殺されてしまった事情 ③コリーと部族警察長マーティン・ハンソン（ギル・バーミンガム）との友情等が浮かび上がってくるが、これらは日本人には馴染みのない世界の話だから、わかりづらい。

本作のテーマはウインド・リバーという土地の寒さ、過酷さだが、なぜネイティブ・アメリカンの居留地はそんな土地に定められたの？そんな限定された土地の中でしか生きられないネイティブ・アメリカンの生活はどうなっているの？さらに、部族警察の役割とFBIの役割分担は？ナタリーをレイプし死亡させた犯人像が次第に明らかになり、さらにナタリーの恋人であったマット（ジョン・バーンサル）の死体も発見される後半になると、ウインド・リバーの人間関係における“勢力分布”が少しずつわかってくる。そして、犯人（たち）の包囲網が狭まっていく中で、さまざまな内部対立も顕著になっていくから、いくらFBIだけが連邦政府の権限を持っていると偉そうに言っている、ジェーンは大丈夫・・・？

◆本作は2017年サンダンス映画祭出品作品で、第70回カンヌ国際映画祭「ある視点部門」監督賞を受賞した。そして、ウィキペディアによれば、本作は「批評家から高く評価されている。」「映画批評集積サイト側による批評家の要約は、『ウインド・リバー』は観客をキャラクターが織りなすミステリーへと誘い込んでいる。脚本は知的で、俳優の演技も見事なものである。工夫を凝らした舞台設定はタイトル通りの恐ろしさを生み出している。」とされている。

ワイオミング州のネイティブ・アメリカンの居留地である「ウインド・リバー」の寒さは、コリーが着る真っ白の衣装や、スノーモービル等で感じるができるが、北大路欽也の「天は我を見放したか！」のセリフとそのシーンが今なお記憶に残っている『八甲田山』（77年）ほどの寒さを感じなかったのは私だけ・・・？また、本作のストーリーはそれなりにまとまっているが、いくらFBIの権限を持っていても所詮新米捜査官のジェーン1人だけでは何もできないこと明らかだし、実際に本作でジェーンが見せた実力はほとんどない。本件の解決（？）に向けては、ほとんどコリーがリードしているのが実情だ。そのため、本作についての私の評価は“まずまず”だから、本作はこの程度のショートコメントで。

2018（平成30）年8月2日記